

令和3年度

年 頭 所 感

国病久原会 役員会





新年のごあいさつ

国病久原会顧問 独立行政法人国立病院機構長崎医療センター院長 江崎 宏典

国病久原会の皆さま、あけましておめでとうございます。健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は新型コロナウイルス感染症に振り回された一年でした。2年に一度開催の久原会総会も残念ながら延期をせざるを得ませんでした。本年は開催できることを願っています。国立病院総合医学会（国病学会）も第74回大会が昨年10月に新潟市での開催が予定されていましたが、従来の対面式（集合形式）での開催は見送られ、インターネットを介したリモート形式（Web会議）で実施されました。これまでは当然と思っていた参加者が一同に会する学会から、リモート形式での学会となりました。国立病院機構関係の会議や研修もすべてリモート形式になり、出張することがなくなりました。この一年の間に他の会議や集会でもこの方式が普通のことになりました。これも「新しい生活様式」ということでしょうか。

厳しいコロナ禍の中で、様々な方々から病院にねぎらいのことばをかけていただきました。またマスク等の必要物品の寄贈も多くの人や団体からいただき、大変励みになりました。この場をお借りして心からの感謝を申し上げます。感染予防の徹底と今後予定さ

れているコロナワクチンの導入でこのコロナ感染は終息していくと信じています。

長崎医療センターでは教育研修への新たな取り組みとして「看護師特定行為研修」を昨年6月より開始しました。この特定行為研修とは厚生労働省が推進している研修制度であり、定められた特定行為（脱水時の点滴など）を行う看護師を養成しようというものです。この研修を実施するためには厚生労働省の審査を受けて指定研修機関になる必要があります。当院は長崎県では最初の、国立病院機構でも3番目の指定研修機関となることができました。本年1月～末に第一期生が8か月間の研修を修了する予定です。修了者は臨床の現場で活躍をしてくれるものと期待しています。

本年が会員の皆様にとって素晴らしい一年であることを願って、新年のごあいさつといたします。





年頭にあたり

国病久原会 会長 廣田 典祥



会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。

昨年来コロナ禍の影響を受けた私達でしたが、これからどう過ごしたら良いのかという多少の不安を抱いたまま令和3年を迎えました。

現職の皆様にとっては毎日が緊張の連続だろうと推察いたしております。日頃から感染対策に関しては、十分な準備と注意を払っておられることでしょう。引き続き精神的な緊張が伴いますがどうか心身を健康に保つよう知恵を絞っていただき、かつゆとりを持って勤務していただきたいと念じております。本院か

らは SENSAI の広報誌を毎号お届けいただき、江崎院長のもとと職員の皆様のご奮闘ぶりを読ませて貰っております。当院の伝統をよく守っていただいております、心強い思いをしております。

昨年、SENSAI(308 号)でも既に紹介がありましたように、名誉院長矢野右人先生が医学功労賞受賞を受けられました。当院の歴史の 1 ページに輝かしい足跡を残されました。OB 一同、心よりお慶び申し上げます。

さて、昨年は国病久原会総会を計画しておりましたが、延期せざるを得ないと判断しました。今年度こそコロナ禍を制圧できるようになるとか、収束の見通しが可能となるという前提条件のもとで安心して総会を開催したいものです。ひたすらそのような環境が整うことを念じております。

私、年齢も 80 代半ばを過ぎてしまいました。いくばくかの余生を得ている現在、一瞬でも貴重な時間であることを噛み締めながら日々を過ごしております。そのせいか、やたらと昔のことを思い出したり、懐かしい場所へ行きたくなったりするのは、これは老いの心の特徴かもしれません。

このところ自粛生活を余儀なくされておりますから、庭先に鉢を並べて、いくつかの花を植え、新春を迎えたいと思いました。これが意外と楽しいのです。昨年はクレマチスの花がよく咲い

てくれたので、新年は幾鉢か、更に増やそうと思っております。
誰かが「花は心のビタミン」と言ったのを思い出しました。

国病久原会のホームページの記事を書くたび、これは私にとって「社会参加」の一つだと思えます。「文章を綴る」ことは、私自身の老いた脳の血流を増やし、神経可塑性に期待して、神経細胞の突起を増やすことになるに違いないと信じています。「書く」作業は脳の言語野（脳の左半球）や知覚・運動野（後頭葉・頭頂葉・前頭葉の広い領域）の神経細胞の活動の活性化を促すからです。というのも、フレイル防止のためには「ロコモ体操」（廣田典祥：健康フェスタ2016 探訪記「ロコトレ」体験、当会ホームページ、平成28年11月）や「歩く習慣をつけること」（米倉正大：ロコモティブ・シンドロームにならないために、当会ホームページ、令和2年2月）が必要なように、脳もトレーニングする必要があるという理屈です。よって老化してゆく脳のリハビリテーションとして「文章を綴る作業」はアンチエイジングとして欠かせないのではないのでしょうか。

コロナ時代、人々の交流が少なくなりました。孤立、疎外、沈黙がそれとなく忍びよってきました。人は所詮社会的動物ですから、このコミュニケーション不足を埋める努力が必要だと思えます。会員の皆様に「会員の広場」への投稿を勧めるのも、当

会の目的「旧交を温め、親睦をはかる」に賛同して戴きたいからです。こういう時だからこそ、お互いの力を結集してゆきましよう。

私が当院で精神科医長として勤務していた頃、強烈な印象を与えてくださった当時の院長、横内寛先生を思い出し、先生の熾烈な生き方を文字にして次世代の人たちに目に触れていただきたいという思いに駆られました。そこで当院名誉院長矢野右人先生並びに同名誉院長米倉正大先生にお願いして「横内寛先生の思い出の記」(米倉正大、廣田典祥、矢野右人：当会ホームページ、令和2年9月)としてまとめあげ、当院のホームページにささやかな歴史として残すことができました。読んでいただければ、あ、昔こんな人がいたのか、と思ってくだされば幸いです。執筆にあたって、矢野・米倉両先生には大変お忙しい中をご協力いただき有難うございました。この「思い出の記」を読むと、人は他人との偶然の出会いによって、その人としての運命的な方向性が定まるのだ、ということを感じます。良き人生の師に出会うことがその人のところを豊かなものにするのだと思います。

今年も皆様にとり良い年でありますように心から祈念いたします。



新年のあいさつ

国病久原会 名誉顧問

長崎県病院企業団 企業長 米倉 正大

久原会の皆さん、あけましておめでとうございます。去年は世界的に大流行している新型コロナ感染症で、明け暮れました。ワクチン開発のめどがついたとはいえ、まだまだ今年もこの感染症と付き合いは続きそうです。会員の皆さんは、多くが60歳以上の方々ばかりなので、感染には一層の注意が必要です。共に頑張りましょう。

さて、私が所属している長崎県病院企業団は、長崎県の離島の医療提供を、どうしていくのか今年も試練の年になりそうです。日本全国人口減少の波が押し寄せている現在、特に離島やへき地での人口減少は、目を見張る勢いで進行しています。島によっては毎年3%の人口減です。これは10年後には島の3分の1の人がいなくなるという計算です。各地域の行政は、過疎地の人口減少に真剣に取り組みだしたからすでに10年以上になりますが、その効果は全く見えません。島でのお産は、減少の一途をたどるし、島の高校を終えた卒業生の90%以上は進

学や就職のために島外に出ていきます。それでも行政

の頑張りで、最近では都会からの若者の移住者も少しずつ増加しています。しかし、人口の自然減は大きく、全体を見れば確実に減少の一途をたどっています。島の人口減の大きな要因は、働く場所がないというのは、大きな要因ではなく、若者もその親も、私もそうですが、都会にこそ若者の幸せがあると信じている精神構造があります。その考えが変わらない限り、人口減はなくならないと、最近考えるようになりました。

長崎県病院企業団の病院では、人口減少が続く地域でも、医療の質を下げることなく、大幅な赤字を出すこともなく、どのように運営すれば、効率的な病院経営ができるのか、いつも考えています。“縮小の時代を生き抜く知恵と勇気”というスローガンを掲げて、この問題に取り組んでいます。人口減、即ち患者数の減少は、医療が非効率となり病院経営に大きくのしかかります。医療の質を低下させることなく持続可能なシステムづくりに知恵を出しながら、進めています。その一環として、今年の4月からは、長崎県病院企業団所属の地域医療連携ヘリを導入しました。RIMCAS(RemoteIslandMedicalCooperationAirService)と名称され、活躍しています。特別診療を行う大学の専門医の搬送はもちろん、治療が終わってまだ歩く

ことができない患者さんの搬送、いわゆる下り搬送にもこのヘリは活躍しています。急性期の治療が終われば、自分の住み慣れた家族のいる離島でのリハビリに早くから専念してもらうためです。

RIMCAS(地域医療連携ヘリ)



このようなシステムはもちろん日本では初めての試みで、今後各地域に広がっていくものと期待されています。





長崎医療センターの縁で作れた LAMP 検査によるコロナスクリーニング体制

国病久原会 副会長 中原 賢一（恵寿病院院長）

皆様、新年おめでとうございます。

昨年は世界を恐怖に陥れたコロナウイルスに振り回された一年でした。コロナの脅威は現在進行形であり、今年もコロナとの戦いが続くと思われます。

長崎医療センターから異動した現在の職場は、約 650 名の高齢者が入院・入所しており、コロナ第 1 波の時から過剰ともいえる警戒体制で臨んでいました。しかし、これまで経験のあるインフルエンザやノロと異なり、簡易検査法はなく、治療法也没有せん。PCR 検査は簡単には行えず、現在でも依然ハードルが高い検査です。

そういう中で、長崎県では壱岐で複数のコロナ症例が発生し、向原先生が勤務される壱岐病院にて対応されました。壱岐病院は米倉先生がトップである長崎県病院企業団の病院でしたので、状況を米倉先生にお聞きすると、熱研の安田教授のご指導で行った LAMP 法に

よるコロナウイルスの検出がコロナの診断とスタッフの（感染していないという）安心感に大変有用であったとのことでした。

恵寿病院では、尻込みせず、積極的にコロナに立ち向かいたいと

考えました。ちょうどコロナ対策の補助金が使える状況でしたので、米倉先生にアドバイスいただき LAMP 検査を導入する決定をしました。病院内に新たに検査室を作り、LAMP 法の検査機器を整備しました。また優秀な検査技師を雇用できたので、米倉先生にお世話いただいて安田教授のラボに研修に出し、その後向原先生にお願いし、壱岐病院の検査室にて現場での研修をしてもらいました。

当グループでは、昨年 11 月のコロナ第 3 波の直前から LAMP 検査を開始しました。検査の目的は高齢者施設内でのクラスター予防です。対象は新規入院・入所者および院内の有症状患者ですが、さらにスタッフに検査を行うのが特徴です。スタッフにおいては、有症状者、県外者との接触者を最優先に検査をしますが、無症状キャリアを検出する目的で、在宅関連の訪問看護、訪問リハビリ、ショートステイなどのスタッフを重点的に、全職員の定期的スクリーニングを行います。定期的に検査をすることで、スタッフに安心感を与え、また大きなクラスターになる前に感染を発見することができると思っています。これらの検査体制を作ることができたのは、米倉先生や向原先生など、長崎医療センターの先輩のおかげでした。医療センターを離れて 8 年が過ぎましたが、何かあると親身になってお世話いただけるのはありがたいことです。今後もこの縁を大事にして仕事をしていきたいと考えています。

長くなりましたが、今年もよろしくお願いいたします。





「正直に生きる」

国病久原会 医師部会 幹事 向原 茂明（吉岐病院院長）

皆さま、あけましておめでとうございます。

コロナ時代のお正月、いつもと違う過ごし方をされている方もいらっしゃると思います。

私事ですが、今年、古希を迎えます。

面白いもので、60歳まではあまり先を考えませんでした。70歳の声を聴くと残りの人生をどう過ごそうか、仕事はいつまでしよう

かと考えるようになりました。ふと思ったことが、「正直に生きてみようか」です。決して、これまで不正直に生きてきたわけではありません。きっかけをくれたのが、安倍前総理の「桜を見る会」関連のニュースです。数年前の「もりかけ騒動」から、下手な嘘をつくなーと思っていました。総じて、政治家は、うそをつかないと成り立たない商売なんだなーと思うようになりました。

さて、正直という言葉に戻しますが、これにはいろんなことわざがあります。

「正直者が馬鹿をみる」「三度目の正直」「正直の頭に神宿る」などあります。「正直者が馬鹿をみる」は、悪賢い者がずるく立ち回って得をするのに反し、正直な者はかえってひどい目にあう。世の中が乱

れて、正しい事がなかなか通らないことをいう。正直者が損をする。とあります。「三度目の正直」は占いや勝負で、一度や二度は当てにならないが、三度目は確実であるということ。転じて、物事は三度目には期待どおりの結果になるということ。

「正直の頭に神宿る」は正直な人には、おのずから神の加護がある。これらから、正直はいいことなんだけど、正直だけでは、世の中うまくわたれない？という感想を持ちます。

不正直には、2通りあるようにおもいます。積極的に嘘で固めてしまうこと。もう一つは、真実を知っていても口に出さないこと。前者は、我々医療人には、論外です。政治家と違って、即刑事罰の対象になります。後者は、どうでしょう。患者さんへ、予後説明だったり、バッドニュースをぼかして少しずつ、開示していったり多用していました。また、プライベートでもありますよね。

もう一つ、正直という意味で、感情を直接ぶつけるというのはどうでしょう。

思ったことをすぐ口に出す。ネガティブなことをお構いなしにぶつける。相手に配慮しない。これらは正直ですか？ただの「自己中心的」な人間のように思います。

以上、まとまりのない話をしましたが、これからはできるだけ正直に生きようと思います。ただし感情的にならず、相手が不快にならないように口をつぐんだほうがいい時にはできるだけあと送りして、でも結果として、楽しい人生を送りたいものです。

今年が、皆さまにとっていい歳になりますように。そして、コロナが
退治されていますように。





「母校のように」

国病久原会 現職幹事

国立病院機構長崎医療センター 副院長 八橋 弘

10月のある日の昼下がり、矢野右人先生と内野雅孝元事務部長と井保則元事務部長の3名の方々が私の部屋、副院長室を訪ねて来られました。突然の訪問で少々驚いたのですが、9月に矢野右人先生が肝炎の医学研究で有名な宮川財団から特別表彰を受けられたことから、そのお祝いで大村に集まられたそうです。話の途中から当初部屋におられなかった江崎院長も合流されて5人で1時間ばかり楽しいひと時を過ごしました。

内野元事務部長は当院の病院建て替えの時の事務部長です。在職当時にもお聞きしていたのですが、厚労省に何度も出向いては病院建て替えについて予算の交渉をされました。そのおかげで国立病院時代、最高峰の病院をこの長崎の地に建てることができました。井元事務部長は、ドクターヘリ誘致の時の事務部長です。全国の国立病院の中でもドクターヘリは初の誘致で前例がないことから、その手続きは大変だったようです。井元事務部長も住民説明会にも出向

いて周辺の住民の方々を説得され、皆さんからご理解いただいたとお聞きしました。話の途中で丁度ドクターヘリが飛び立ち始めました。

私の部屋からベランダに出られて、お二人とも感慨深くヘリが飛び立つ様子を見ておられました。ちなみに当院のドクターヘリは、この12月に初出動から14年が経過し、その累積出動回数は、もう数日で1万回に達します。

国立病院の事務職の方々は、数年ごとに九州内の国立病院の転勤を繰り返しながら、また厚労省にも出向しながら昇進する人事システムとなっています。そのような移動の中で、お二人とも当院の事務部長在職中の仕事が最も印象に残っていて、最もやりがいがあった、長崎医療センターを卒業した母校のように思っている、と言われました。この「母校のように」という一言にお二人の思いが凝縮されていると私は感じました。

今、当院の職員数は1200名を超え、大きな組織体となっています。その組織体に在籍している職員同士の横のつながり、そして母校のように思いを寄せていただいている病院OBの方々、すなわち久原会の方々との縦のつながり、このふたつが重なって今の当院が存在しているように思います。

感染症の脅威、人口減少の顕性化、変化する医療環境、世代間の価値観の相違、そのような変化と多様性の世の中で、常に一歩先を見据えながら病院運営をおこなうことは簡単なことではありません。日々壁にぶち当たることばかりで、時にため息がでることもあります。しかし、その時には、その時々、その困難を乗り越えてこられた先人達は、その時に何を考え、どのように行動されたのか、私は当院の歴史を振り返る

ようにしています。そして最近、その思い出をまとめて文章化したものを SENSAI に投稿してきました。私は歴史のある病院は強いと思っています。

久原会の皆さま、ふと思われた時には、いつでも母校である当院を訪ねていただきたいと思います。





新年のご挨拶

国病久原会 現職幹事

臨床研究センター長 黒木 保

新年あけましておめでとうございます。昨年は、“自粛”の一年でした。学会のほとんどは web 開催となり学会に関連する出張も皆無に近い状態でした。学会会場の熱気が恋しくもありますが、web 会議にも慣れて、それなりの楽しみ方を会得している最中です。

臨床研究センターのコンセプトである「エンジョイリサーチ」を今年も推し進めたいと思います。一体感をもって病院全体でリサーチを楽しむ風土を作り上げていきたいと思います。今年もよろしくお願いいたします。

庭のシクラメンです。
シクラメンは元々寒さに弱く、鉢植えで室内にて育てるものでしたが、品種改良により寒さに強く屋外で植栽できるシクラメンが市販されています。





日本輸血・細胞治療学会の
「I&A 認証施設」の認証を受けて

国病久原会 現職幹事
統括診療部長 吉田 真一郎

新年あけましておめでとうございます。

昨年 11 月に日本輸血・細胞治療学会九州支部会の会長を務めましたのでご報告します。

当院は 2008 年に九州の病院で初、全国の国立病院機構病院で初の、日本輸血・細胞治療学会の「I&A 認証施設」の認証を受けるなど、先進的な輸血の取り組みを進めています。支部会では、臨床検査部門、看護部に取り組みの発表をお願いしました。今回、オンライン開催に変更となったことで、九州外からも多数の参加があり、全国の輸血関係者に対して、長崎医療センターの輸血について、しっかりとアピールすることが出来たと思います。

本年も輸血医療も含め長崎医療センターの診療機能の充実に取り組んで参ります。皆さまのご支援をよろしくお願いします。





年頭所感

国病久原会 現職幹事

事務部長 有岡 雅之

久原会のみなさま新年明けましておめでとうございます。

去年は世界中が新型コロナウイルス感染症に振り回された一年でした。国立病院機構においても、コロナ禍の前までの重点課題であった「地域医療構想」「働き方改革」などは棚上げに近い状況となってしまいました。新型コロナウイルス感染症の拡大が多くの混乱や悲しみをもたらしたことは事実ですが、一方では衛生意識の向上や海外からの人の移動が制限されたことから、インフルエンザが大きく減っているのではないかととも言われ、そうであればそれにより救われた命も数多くあったでしょうし、また物流や途上国における工場の停止により地球規模で大気汚染が改善されたことが実証され、九州へのPM2.5による大気汚染も劇的に改善されたということです。「人間万事塞翁が馬」という言葉があるように、幸福も災いも表裏一体であるならば今年は幸福の年となるよう、事務部としても干支の牛にあやかりまして 一步ずつしっかりと歩みを進め、与えられた課題に積極的に取り組んでいきたいと思えます。

最期になりますが、今年が皆様にとって良い年となることを願って新年のあいさつとさせていただきます。



年頭所感

国病久原会 現職幹事

看護部長 西山 ゆかり

あけましておめでとうございます。

久原会の皆様には、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年はナイチンゲール生誕 200 年の年でしたが、改めて看護の力を実感する年でした。

「真の看護は、感染はそれを予防すること以外は顧みない。真の看護師が必要としている唯一の防御策は、清潔さ、開け放たれた窓からの新鮮な空気、そして患者への絶え間ない気遣いである。賢明で思いやりのある患者管理こそが、感染に対する最善の防止策である」
150 年前に語られたナイチンゲールの言葉です (看護覚え書きより)。
現在も色あせることはありません。一人一人が自分に割り当てられた任務を全うし、「その人がその人らしく」過ごしていけるよう、職員一丸となって、取り組んでいきたいと思ひます。

今年もご支援のほど、よろしくお願いいたします。

